

笹本稜平著 『K2 復活のソロ』  
(祥伝社)



玄海灘の潮風を浴びて成長した私は、山とは縁の少ない青少年期を過ごした。社会人になってからは、二度にわたり欧州に駐在し、何度かアルプスを見上げながら家族と休暇を過ごす機会を得、山を身近に感じるようになった。

退職して帰国後は、奥北山や吉野山系を友人と、あるいは一人で山地図を頼りに歩く楽しみも得た。そして、著者の一連のヒマラヤを舞台とする山岳小説に嵌ってしまった。

ヒマラヤ登山といえばエベレスト初登頂のように、大規模の登山隊が次々とキャンプを組み標高を上げながら、最後は精鋭が頂を目指すもの、と思っていた。ところが現代の主流は、何と、一人あるいはごく少数の精鋭が、数日で切り立つ氷壁を登り、最速ルートで登頂し下山するもので、命をかけて技能、体力、技術力、精神力の限界を極めるものという。この小説は、エベレストに次ぐ世界二位のヒマラヤの高峰K2の冬期初登頂に挑む日本人クライマーの登攀物語である。

著者は本名をふせたまま五年前に急逝した。(秦 順之)

三川みり著 『呱呱の声』(龍ノ国幻想8)  
(新潮文庫)



ファンタジーは、この世とは違う価値観や仕組みの世界に入り込めるのが面白い。特に架空の生き物たちが楽しい。ここには龍が居る。白銀の体に金色の瞳をしている神聖な感じ。一方動きの描写には、動物的な強さや存在感を感じる。龍が来る時に吹く強風と匂いには、神の眷属であつても同じ時空を生きる存在であることを、肌を感じる。

物語の役どころは、血筋を認識した皇尊と協調して、大地になった地龍を有め眠らせる存在。神事の中心地の龍の原だけにいる。が、皇尊が龍の原を出た時は、認識出来なくなり、大雨という異変を起こしつつ外の国々を彷徨う。

『呱呱の声』の巻末で、龍は戻って来た皇尊を見つけて歓喜乱舞する。久々に大量の龍が登場。その風で産屋にと張ったテントが壊れそうになる。「子が生まれる」という皇尊の言葉に、「子」という認識を龍が持つ。それは、皇尊を血筋ではなく個人として認識した瞬間だった。また新たな展開がありそうだ。登場人物のこれからと共に、次巻が楽しみだ。

(松本由利)